戦争と日常

現在の広島は、原爆が投下されたという過去を持ち、核兵器に反対し平和を願う都市である。しかし、昔はその反対だった。中心には陸軍があり、軍都広島と呼ばれていた。

日清戦争や日中戦争の際には広島に最高統帥機関がおかれ、港からは多くの兵隊が出発していった。当時は国鉄が敷かれていたのが広島までだったため、広島は戦争の最先端であり、兵器廠、被服廠、糧秣廠――人間の食糧や馬の餌を作る工場――と多くの工場も存在していた。今の広島の様子からは全く想像できない景色が広がっていたのである。

当時の学校や学生も、今とは全く違う。日中戦争中には、学校で中国や朝鮮が馬鹿にされ、差別が広まった。朝鮮から広島までやってきた子を身なりを理由にいじめる人もいた。

太平洋戦争中には、学校で学習することすらできなくなってしまった。今、私たちは当たり前のように学校に行き勉強をしているが、それもかなわない。学生は様々な労働をすることになった。当時、上級生は工場動員、下級生は建物疎開が主な仕事だった。建物疎開とは、空襲等による火災で延焼するのを防ぐために建物を取り壊す作業のことである。また、工場では、着古した軍服をまた着られるようにするための洗濯等の仕事が存在していた。

敗戦へと向かっていく日本だったが、学生が大人に「勝てるのか」と質問すると叱られた。また、「戦争反対」という意思表示をする人もほとんどおらず、すぐに捕まってしまうため、思っていることを口に出すことすらできない。今となっては考えられない、暗黒の時代がそこにはあった。

８月６日の朝。広島に原子爆弾が投下された。飛行機は１、２台しか通過せず、爆弾が落ちた気配もないのに、街は火につつまれた。建物疎開を行っていた下級生は大きな被害を受け、学校の校舎はめちゃくちゃになった。薬もなく、人が次々と亡くなっていき、生徒を生徒が火葬することもあった。両親が生きているのではないかと探しに来ては、間に合わなかったかと泣いた。一家全滅のため誰も探しに来ない遺体があった。

77 年前。今平和記念公園がある場所に、たくさんの瓦礫と遺骨があったという。

今私たちが当たり前のように過ごしている日常は、戦時中は日常ではなかった。すぐ隣に死がある時代が確かに存在していた。当たり前の日常に感謝すること、そして過去の戦禍を語り継いでいくこと。私たちにできることを少しずつ、実行していくことが大事だと思う。